

# 早起きのお豆腐屋 さん 夜は布団の 上で夫婦セックス

少しさびれた街の商店街。

毎朝早く起きて支度をする豆腐屋さんが一軒あった。

主婦のカズエは、夫のヒロナリと4年前に出会った。

とある試食パーティー。

ヒロナリの食への情熱に惹かれて付き合い、結婚までに至った。

幸せな日々を過ごしてきた……………。

ある日・・・

「商店街の近くの銭湯が復活したらしいよ」

ヒロナリはカズエに告げた。

銭湯の名前は

“赤麻（せきま）の湯”

街の過疎化で一度は潰れたが

この度色々な経緯があり復活。

そして数日前カズエとヒロナリは二人でそこへ出かけた。

・・・・・・・・・・時間にして自宅からそれほどかからない近い場所である。

夜の街は涼しい。

原付を二台、小さな横の駐車場に停めて  
石段の玄関へと入る。

・・・・・・・・・・この時、

なんだか二人は不思議な妙な気持ちに  
包まれる。

銭湯の暖簾をくぐった前後で魔法にと  
らわれたようにエッチな感覚へと変わ  
っていたのだ。

.....

.....

.....ごく普通に銭湯への  
入浴を終え、

帰り道コンビニへ立ち寄りホット紅茶  
を買う。

自転車が散乱、若者たちがタバコをふか  
していた。

・・・・・・・・肉体のざわつきが二人を包  
む。

二人は不思議な気持ちのまま近くの河川敷へと小道を歩いていった。

星空の下少し川沿いは卑猥な色に変わっている。しかし穏やか。

・・・・・・・・どこまでも妙に穏やかだった。

・・・・・・・・・・深い静寂の夜。

二人は衣服を脱ぎ始めた・・・・・・・・。

「なんだか、あの銭湯昔と変わっていた  
よね・・・・・・・・」

ヒロナリは妻に話した。

「そうなの？私には行ったことないから……」

そう言いながら白い下着を脱ぐ妻。

「なんか……どことなく穏やかすぎない感じがあったっていうかさ」

街はすっかり真っ暗。

「どういうこと？」

月がほんの少し雲がかり、星が散らばっている。

「いや・・・・・・・・・・な、なんとなくさ・・・・・・・・」

川沿いの道にスナックが数件。

裸の男女が並んでいた。

川浴い。

軒に立った電灯の明かりで二人の裸が照らされる。

二人は銭湯の内観を思い出す。

油絵で女性の裸が描かれていた。

・・・・・・・・二人は気がつけば裸になっていた。

すっぽんぽんの素っ裸。

緩い風が川の下流に向けて吹く。

海の方へ向けて流れていく。

風や空気の小さな水滴が二人の肩や腕  
をなぞる。

夏の終わりにしては肌寒いほど涼しい。

二人はムッチムチの太ももをくっつけていた。

汗ばんでいる膝辺り。

「でも言われてみれば確かにあの銭湯の女風呂なんだか卑猥だったわ」

妻が一言。全身が汗ばんでいる。

風が止んだ。

パンツをずらしながら・・・・・・・・。

旦那のヒロナリは遠くを見つめ言う。

「あの銭湯さ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・いつも昔友人たちと行って、帰りに暖簾の立ち飲み屋で夜更けまで話していた記憶ばかりだけど」

学生時代の話。

その股間にはペニスが反り返っている。

妻のカズエは少しため息混じりにつぶやいた・・・・・・・・。

「それより……月が綺麗……」

妻の目には

銭湯のその光景すら卑猥に映ったのか。

月だけでなく、映るもの全てが妙に淫ら

だった。

全てがエッチに・・・・・・・・。

そんな風に映ってしまう。

裸で・・・・・・・・女性たちが入浴している  
という事実。

妻は気がつけば河川敷の地面に下着を落としていた。

くしゃくしゃになる白い下着。

時間はほとんど経たないうちに・・・。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)